

Beyond The Bounds 境界を越えて

～アメリカの留学生と鳥取の学生、

そして智頭で生きる人たち～



街を通り過ぎると、

そこにはのどかな
風景が。



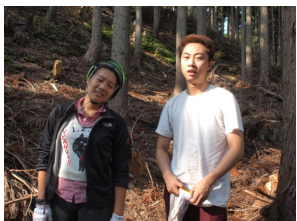
杉山に囲まれた
素敵な学校を借り、

いざ山へ。



倒したり、

運んだり、



林業って
たいへんな仕事だ。

アメリカの大学から来た留学生およそ 10 名、
鳥取環境大学からの参加学生もおおよそ 10 名、計
20 名ほどの青年たちが、智頭の杉山へ入る。

世界規模の問題でもある、「持続可能な社会づ
くり」について、智頭での取り組みをモデルケー
スとして体験実習、研究する。

第三次産業の肥大化により実態に触れようとす
る機会が少ない第一次産業、第二次産業を考
えることが、これからの社会づくりにおいてど
れだけ重要なことか、鳥取での研修は教えて
くれる。

林業はただ木を切って売るというものではなく、
山そのものを保守するため、緻密に計算をして
伐採をしている。

切りすぎたら土砂崩れが起こりやすくなる。
切らなすぎたら大規模な洪水が起こりうる。
そのような山の知られざる脅威と人の知られ
ざる努力を、智頭の守り人は教えてくれる。

実際に山へ入り、学生たちは山のプロたちから
伐採のいろはを教わる。数えきれないほどの
発見がある。

どの木を切るのか、どこから切るのか、どの
程度切り込むのか、素人には判断できない
ことを物の見事にやってみせ、学生たちは
感嘆する。

楔を打ち込んでハンマーで倒したり、伐採
したものをトラックに積んだり、「切る」とい
う行為がほんの一部であることを体験し、
山仕事の奥深さを知る。

伐採した木の数に応じ、学生たちは「杉小判」という地域内通貨をいただく。

ただのボランティアではなく、特殊な形ではあるが報酬があるのが、この取り組みの絶賛すべきところだ。

いただいた杉小判を使って、地元のお店でお土産を購入する。価値の循環を分かり易く実体験でき、持続可能な地域づくりを実現する優れた制度である。

そしてみんな体験することで、初対面である二校の学生らは、すっかり同士になっている。

同じ経験をする者同士、共有したいことや気持ちはたくさん出てくる。その思いが生まれることで、英語と日本語、主に二つの言語を使い合う機会を生み、非母語でのコミュニケーション能力の成長に大いに役立っている。

地域の方々とも一緒になって、智頭について勉強する。幅広い年齢層が一つになって地域について考える。そこにはもちろん、性別や人種的な差別は一切ない。

留学生、地元の学生、地域に生きる人々。それぞれの視点を活かした意見が次々と出てくる。



それでも仲間たちと一緒になら、

前向きに頑張れる。



座学だって、

ディベートだって、



みんなで真剣に取り組める。



そして頑張った日本語での発表の後は、



地域の人たちとも仲間になるんだ。





民泊をしたり、

みんなで雑魚寝
してみたりして。



ここでは東京のように歩けばすぐコンビニがあるわけではない。ICカードでポンと叩けばすぐ隣町に行けるわけでもない。

限定された手段・範囲の中で、自分を、友人を、地域をより良くするためには？

ただひたすらに、他者とコミュニケーションを取っていくしかない。

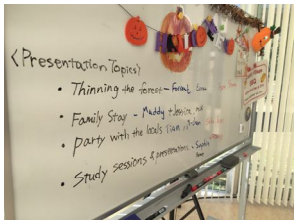
それはしがらみなどといった意味で面倒なこともあるかもしれないが、見返りは大きなものとなる。

智頭で過ごす四日間は、持続可能な社会づくりを学び、体験し、何よりいくつもの新しい共有を生む。

留学生たちはステレオタイプではない日本の現状の一つを知り、「日本=東京」ではないイメージを獲得する。

彼らは口々に言う。こっち（鳥取）の方が良い、と。

その言葉は、豊かな自然環境や魅力的な地域づくり、そして、境界を越えた仲間たちと過ごした思い出から生み出されたものである。



挨拶代わりの課題にも、

真面目モードで
向き合って、



こうしてみんな、仲間になるんだ。